

## 高大連携仁淀ブループロジェクト

○島田美穂，桂信太郎，井形元彦（高知工科大学）

### 1. はじめに

地域の活性化に、地域に存在する資源をそのまま活用しようという動きは、様々な形で活発になってきている。大学や高校など、学校を地域の資源として活用することで、地域に貢献する人材育成を促進する取り組みもなされている。高校と大学の連携は、国内で広く取り組まれて久しい。文部科学省は「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について」において、以下のように述べている（文科省 HP から引用）。「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携の位置付け」として、「中高一貫教育や現行学習指導要領の実施等により高等学校の多様化と選択の幅の拡大は更に進展している」ことから「特定の分野について高い能力と強い意欲を持ち、大学レベルの教育研究に触れる機会を希望する生徒の増加が予想され」ている。これらの「生徒の能力・意欲に応じた教育の実現を目指す」ために「高等学校・大学の双方が、後期中等教育機関・高等教育機関としてそれぞれ独自の目的や役割を有していることを踏まえつつ、高等学校と大学との接続を柔軟に捉え、生徒一人一人の能力を伸ばすための、高等学校・大学双方が連携した教育の在り方」を高大連携といい、これを目的としている実践活動であると文部科学省は示している。公立大学法人である本学においても、こうした活動は日常的に考えられ、高校側からも大学側からもニーズがある。本学では、地域教育センターや地域連携機構、あるいは各学群が関与しながら高大連携に取り組んでいる。近年、我々が関与している高大連携の取り組みを報告し、現状の把握と課題の抽出を試みる。

### 2. 調査概要

高知県立伊野商業高校との高大連携について報告する。なお、この事例については、プロジェクトの構想から初期までを、2016年9月4日に長野県小布施町で開催された第8回地域活性化学会全国大会において、2017年度までの学生のリーダーである尾上夏菜が学会報告している（参考文献参照）。本報告は、2代目のリーダーである島田が全体経緯とその後の経過を含めて報告する。

高知県のいの町は、高知市中心部から車で30分ほどの距離にある人口約25,000人の町である。いの町には、四国三大河川のひとつである仁淀川が流れており、夏期の川水の色が美しいことから「仁淀ブルー」と呼ばれ、これが定着しつつある。仁淀川は、古くからこの地域の住民と共存しており、地域の生活に大きな影響を与えている。いの町では古くから製紙産業が盛んであり、現在でも20社あまりの製紙業者が事業を営んでいる。例えば大規模なものは、国内トップメーカーの子会社工場があり（従業員約100名）特殊紙を抄紙していたり、地元資本（従業員約100名）が不織布メーカーとして生き残っていたりする。小規模なものは、伝統的な土佐和紙を家内制手工業のような形で事業継続している。この地域では、農業の閑散期の副業として展開してきた紙産業であるが、質量ともに豊富な仁淀川の水と、運河としての利用の便の良さが発展に大きな理由であるとされている。この高大連携事業は、こうした背景から、仁淀ブループロジェクトと命名された。命名は、プロジェクトのリーダーである本学地域教育センター長である長崎教授である。一方で、伝統的な産業を有し、交通アクセスやインフラ整備も地方としては恵まれがちな地域であるが故に、県都とのアクセスのよさから仕事も買い物も高知市に依存する町の体質から抜け出せないとの見方が強い。全国の地方がそうであるように、この地域でも人口減少の影響を受けながら徐々に活力が低下している。また将来もこの傾向は続くと言われる。地元の商店街や学校も、危機感を持つ関係者も少なくない。こうした背景から、いの商業高校を中心として、地方自治体、商店街、観光協会などが、大学と連携しながら地域の情報発信や商品開発を通じて地域課題解決能力の醸成と人材育成に取り組んでいる。2015年9月、高知工科大学地域教育センターを通じて、高知県立伊野商業高校との連携を打診された。センター長の長崎政浩教授がプロジェクトリーダーとなり、月に1～2回のペースで、野町校長、安藤教頭、商業科指導主事、学年主任、長崎教授、桂で、プロジェクト会議を行った。伊野商業高校のICTコース約15名が、大学生とともに「地域を考える姿勢を身につけ、発展的・創造的な思考や態度を身につけることを目的とする。知る、考える、行動する、報告・改善を通じて実践力とチャレンジ精神およびコミュニケーション能力を身につけることを目標とする」とのことであった。初年度である本年度は、

伊野商業高等学校、伊野町役場、伊野町商店街、いの町観光協会と高知工科大学の地域教育センターが連携して、伊野町内の巡検や議論をベースとして、①伊野商店街の活性化（商品開発やマーケティング）、②ICTを活用した仁淀ブルーの発信提案、③高知工科大学／内閣府連携「地域活性化システム論」を通じた課題発見と解決案の提示、などを実施する。大学側としては、実態にせまるアプローチ法、課題解決に向けたフレームワークを提示する、とした。2016年4月15日、仁淀ブループロジェクトのキックオフを実施。学外からは、黒岩正好県議会議員、野町校長、安藤教頭、商業指導主事、伊野商業高校生17名が参加、高知工科大学からは、伴学群長、長崎教授、桂、井形、桂研究室学生、伊野商業卒の本学群学生が参加した。キックオフは、顔合わせとアイスブレイキングが中心であったが、今後は3年計画で、県庁、伊野町役場、観光協会、青年会議所、産業振興センターと協働し、①仁淀川等の地域コンテンツを全国・世界へ発信するICT学習、②いの町商店街活性化と地域産業振興、③地域活性化システム論への参画と全国地方の実課題発見解決、を行うことが確認された。野町校長によれば、尾崎知事が県立高校のあらゆる意味での強化を意図しておられ、こうしたプロジェクトに至った側面があるとのことであった。

第1回地域巡検を実施した。2016年5月6日午後実施された。土佐電鉄いの駅を起点として、伊野琴平神社、伊野町商店街筋、梶本神社（いの大国様）を巡検した。梶本神社は1200年以上の歴史があり、商売繁昌、家内安全、縁結びの神様であり、伊野町の中心市街地にある。春の大祭は約10万人の参拝客がある。第2回の巡検調査は、2016年6月10日午後実施された。土佐電鉄いの駅を基点として、日本製紙パピリア株式会社高知工場、吉井源太翁生家を見学し、その後は、高知県立紙の博物館、商工会、観光協会にグループで分かれて行動した。

2016年7月1日（金）には、全国のICT活用事例を学ぶセミナーを実施した。このプロジェクトにおける伊野商業高校の参加者はICTコースの生徒であり、ICTを活用して、例えば、商店街の活性化を提案したり、課題解決を模索している。ICTの全国における活用事例をまなぶため、この分野の研究者（大学教員）を招聘しながら、セミナーを実施した。地域の現状と課題、地域活性化とは何か、ICTの特徴とは何か、ICT活用国内事例、グループワーク等を実施した。高知工科大学永国寺キャンパスにおいて、2016年7月11日午後、第1回中間報告会を実施した。参加者は、長崎政浩教授（高知工科大学／プロジェクトリーダー）、伊野商業高校生、安藤千速教頭先生、市原指導主事、谷川教諭、桂信太郎、桂研学生の計26名であった。

### ●2017年度の展開

4/15（金）14:00キックオフミーティングを行い、5-6月に巡検およびヒアリング調査を数回実施した。6/10（金）13:40-17:00いの町紙の博物館においてセミナーを実施、7/1（金）13:00-15:00ICT講演会を実施した。8/26（金）教員のミーティング、10月：地域活性化システム論への参加（野町校長、安藤教頭、市川指導主事、谷川教諭、高校生）、11月には「高知経済をどう見るか」伴金美教授が講演した。高知工科大学生がメンターとなり7回のグループワーク実施。12月：成果報告会およびフィールドワークを実施した。また2/14（火）：伊野町舎1Fにおいて、いの町長および町民に対する政策提言公開プレゼンテーションを実施した。教員とのミーティングでは、教員からも生徒からも成果を実感しているとの報告があった。生徒が主体的積極的に取材調査を行うようになり、社会貢献を意識した行動発言をするようになったなどの反応がある。今後とも是非継続いただきたいとの要望が出ている。

### 3. 考察と今後の展開

こうした高大連携の取り組みは、高校側の生徒の教育的な側面はもちろん、たとえば実業高校のありかたそのものを見直すよききっかけになる可能性がある。実業高校は、普通科との差別化として、資格取得や部活動の強化、地元就職に注力されてきた側面があるが、今後は、生徒自身のキャリアプランを念頭に置きながら、地域の課題解決能力の育成や地域企業との連携強化にも注力することで、幅広いニーズに対応できるのではないだろうか。少子高齢化の進む地方において、高等学校の統廃合問題も避けて通れない課題であり、この議論にも一石を投じる可能性がある。目標である「地域を考える姿勢」は実践を通じて身につけることができつつある。今後は、地域の活性化に取り組んでいる大学生と高校生がさらに交流する中で、「発展的・創造的な思考や態度」、「報告・改善を通じた実践力とチャレンジ精神およびコミュニケーション能力」をより高めていければと考えている。さらに、ICTコースという特色を生かした提案も期待している。

#### 【参考文献】

尾上夏菜、桂信太郎、井形元彦「高知県いの町における地域活性化のための高大連携プロジェクト」『地域活性化学会第8回研究大会論文集』（於：長野県小布施町）2016年9月。